



キリストの十字架



アンドリュー・マーレー
Andrew Murray

オリーブ園

この小冊子は最初 South African Pioneer誌に掲載され、後に勝利者誌に掲載された
「キリストの十字架」に関する記事からの抜粋です

2011年 オリーブ園クリスチャン古典ライブラリー 翻訳

<http://www.ogccl.org/>

目次

第1章 御霊は十字架に導く

第2章 自分を否んで十字架を負う

第3章 十字架は神への道

第4章 十字架の勝利

第5章 この世の磔殺

第1章 御霊は十字架に導く

「キリストは永遠の御霊により、傷のないご自身を神にささげられました」（ヘブル4:14、改訂訳）

キリストの十字架はキリストの御霊の最も高度な表現です。十字架はキリストの最も重要な特徴であり、彼を天地万物から区別します。十字架は永遠にわたって御座の仲保者としての栄光を彼に与えます。キリストを十字架に導かれた御霊を真に知るまで、私たちは十字架を知ることはできませんし、キリストを知ることもできません。

キリストを十字架に導かれた御霊の何たるかを私たちが見いだすとき、私たちは御霊がいかなる理由でさらに偉大なテーマであるキリストの十字架の一部にすぎないのかわかるようになります。また、どのような理由でペンテコステの聖霊はなおも十字架の御霊であるのかわかるようになります！御霊はキリストを十字架に導かれましたが、それと同じように、御霊は十字架から贖われた私たちに流れ、御力を与えてくださいます。その時、私たちはさらに次のことを見いだします。すなわち、御霊はキリストを十字架に導き、十字架は聖霊の賜物をもたらしましたが、それと同じように、御霊は常に十字架に立ち返られるのです。なぜなら、御霊だけが十字架の意義を啓示することができ、十字架の交わりを伝えることができるからです。御霊はキリストを十字架に導き、十字架はキリストと私たちが御霊の傾注に導きます。さらに、御霊は私たちが十字架に連れ戻されるのです！

私たちの命である十字架

「十字架の意義は十字架を負うことと贖いしかない」とは聖書は教えていません。また、「私たちが十字架の完了した御業に信頼する時、十字架に対して私たちが取るべき姿勢は十字架の何たるかを感謝して確信することだけである」とは聖書は教えていません。いいえ、聖書が私たちに教えているのは、「最高に親密な霊的交わりにより、十字架は私たちの命とならなければならない」ということです。私たちはキリストと共に十字架につけられた者として生きなければなりません。また、私たちは肉を十字架につけてしまった者として歩まなければなりません。さらに、私たちが肉に打ち勝つことができるのはただ、「肉は十字架につけられた」と毎時見なすことによるのですから、そのような者として歩む必要があります。私たちは日々十字架を担い、十字架を誇るべきです。なぜなら、私たちがこの世に対して持つべき姿勢は常に、この世に対して十字架につけられた者としての姿勢でなければならないからです。この世は私たちに対して十字架につけられたのですから、この事実を理解して感得する必要があるのです。十字架の御霊だけが真のクリスチャン生活を形成して印づける唯一のものであり、これこそ私たちが持つべきキリストと同じ心構えです。ですから、なぜ十字架の御霊が唯一の力だったのか私たちは知りたいと思います。この力によってキリストは私たちのために命を勝ち取ることができたのであり、この力によってのみ私たちは彼の命を所有して楽しむことができるのです。

第一に、イエス・キリストが歩まれた道の重要性は、苦難の大きさや死への実際的明け渡しにあるだけでなく、彼の原動力の性質にもあります。そして、この性質は最後の瞬間よそから来た何か他のものではなく、彼の地上生涯の全行程を通して彼の原動力となり、彼を動機づけたものでした。この御霊が信者の生活の活動原理となるとき初めて、「キリストと共に十字架につけられた」という思想は真の意義を持つこととなります。私たちの主は彼の内にあったこの心と、どんな代価を払ってもそれを遂行する力とをどこから得られたのでしょうか？その答えはこの御言葉にあります、「キリストは永遠の御霊により、傷のないご自身を神にささげられました」。

この永遠の御霊は誕生の時からキリストの内におられ、「私は私の父の事柄の中にとどまらなければなりません」と言うことを彼に教えました。この御言葉は十字架の従順の種を内包しています。この永遠の御霊は彼をバプテスマに導き、自分を低くして一人の罪人としての取り扱いを受けるよう導きました。この御霊により彼はそのとき新たにバプテスマされ、十字架の死にふさわしい者とされました。バプテスマは彼を十字架の死へと分離したのです。この御霊により彼は荒野に導かれ、そこで抵抗し、勝利を得、奮闘を開始されました。この奮闘はカルバリで終わりました。この御霊を通して彼は一步一步導かれ、自分の忍ぶべきあらゆる苦難について述べ、それらに遭遇して耐え忍ばれました。預言者たちの書に「キリストの御霊が予めキリストの苦難について証しされたのです」とあるように、永遠の御霊を通してすべては成就され、完成されました。肉に住まわれる神の御霊は、必然的に勝利のうちに十字架へと導かれます。

十字架は御霊の思い、御霊の要求と働きの最も完全な表現です。神が人を獲得してそれを罪から解放するには、その人を屠る以外に道はありません。宇宙広しといえども、罪の力から解放される道は罪に対して完全に死んで個人的に罪から分離される以外にありません。神が要求されることを御霊は行われるのです！御霊は人なるキリスト・イエスの内に働かれました。キリストはしみのない聖なる方です。それでも、キリストは罪に対して死ぬ必要がありました。それは彼と私たちが一つになるためであり、また、人生の道における私たちの先駆者としてでした。彼は今、キリストの霊としてその働きを彼の各肢体の内で行っておられます。

十字架の霊

御霊に満たされることを願う私たちはみな、ここにとどまって礼拝しましょう。御霊は十字架の死に導かれます。御霊がキリストを墓からよみがえらせる前、御霊が私たちのためにキリストの内に行われたこれより高い働きはありませんでした。それと同じように、御霊が信者のために行われる働きの中で、信者を十字架の完全な交わりに導くことほど高い働きはありません。ここで中断して礼拝し、それが何を意味するのか理解できるよう祈りましょう。御霊がキリストを十字架の道に導かれたように、あなたは御霊に真に明け渡して十字架に導かれたのでしょうか？御霊の豊かさを求めつつ、キリストの内に住まわれたのと同じようにあなたの内に住むことを願われる御霊の唯一の御旨に完全に同意して、十字架の御霊に明け渡されたのでしょうか？これがキリスト

にとって栄光への唯一確実な道だったように、あなたにとってもそうなのです。

第2章 自分を否んで十字架を負う

「だれでも私に従いたい者は、自分自身を否み、日ごとに自分の十字架を負って、私に従いなさい。

誰でも自分の命を救おうとする者はそれを失い、

誰でも私のために自分の命を失う者はそれを救うからです」(ルカ9:23, 24)

私たちは前の黙想で、弟子が十字架を負うこととキリストに従うこととの間には何と深く緊密な関係があるか見ました。ここではさらなる思想が示唆されています。「自分を否み、自分の十字架を負って、私に従いなさい」。十字架を負うことと従うことの最も深い本質がここで明かされています。クリスチャンがキリストに従おうと熱心に努力し、ある程度自分の十字架を負っている時でさえ、隠れた力があって抵抗し、反対し、妨げます。願い、意志、心を傾けて完全に従うことを祈り、誓い、そのために奮闘しているように見えても、その人の最も内側の自己は主が召しておられる十字架を拒んでいるのです。自己は人の存在の真の中心であり、統制する力であり、十字架を受け入れることを拒みます。十字架を負うことについて二度目に語られた時、キリストがペテロと私たちに教えて下さったように、自己を全く否むところから始めなければならないのです。

十字架は死を意味する

十字架を負うことは死の受容、死への降伏を意味します。自己は人の内なる実際的命であり、死ななければなりません。これから始めない限り、十字架を負うことにもイエスに従うことにも絶えず失敗するでしょう。自己を否み、自分の十字架を負いなさい。自分の命を失う者はそれを見いだします。

自分の命を憎み、失うよう、キリストは私を召しておられます。人生に正当な価値を与えるもの、私自身の正当な人格を否むよう——私自身を否むよう、キリストは私を召しておられます。ではどうして、この命をまず十字架の下に置き、それから十字架に付けなければならないのでしょうか？どうして、彼が私のために十字架上で死なれ、私のために命を勝ち取って下さったのに、なおも私は死に、自分自身を否み、日ごとに私の十字架を負わなければならないのでしょうか？

なぜ十字架なのか？

その答えは単純ですが、それでも理解するのは容易ではありません。理解できなくてもイエスに従うことに同意する人に対してのみ、真の霊的答えが開かれます。アダムの罪を通して、人の命は高い状態から落ちてしまいました。墮落の前、人は神が御力と祝福とをその中に働かせるための器でした。しかし、人はこの世の力の下に陥ってしまいました。この世では、この世の神が統治支配します。そのため、人は奇妙で不自然なこの世の命に取り憑かれた被造物になってしまいました。神の御旨、天、聖潔のために人は創造されたのに、それらは人にとって暗くなり、失わ

れました。肉の快樂、この世の快樂、自己の快樂はみな、悪靈の暗闇の呪われた働きであるにもかかわらず、自然で魅力的なものになりました。それらがいかに罪深く、惨めで、致命的か、人には見えず、わかりません——それらは神から離れており、みな自分自身の内に地獄の種を宿しています。そして、この自己、この人の命の根幹を、人は大いに愛していますが、自己は神からではなく悪しき者から出たすべてのものの集合体に他ならないのです。自己には天然的な美点や見かけ上よく見えるものがたくさんありますが、自己の力と高ぶりはすべてを墮落させ、自己をまさに罪、死、地獄の座とします。

ひとたび、人が自己を完全に否むこの生活に同意するなら、

十字架を歓迎し

愛するようになります。十字架は神に定められた力であり、私たちを悪の力から解放します。私たちが神の御子のかたちに同形化される上で悪の力は唯一の妨げですが、私たちはこの悪の力から解放されて、御子と同じように御父を愛し、御父に仕えます。自己を否むことは内なる精神であり、十字架を負うことはその現れです。

「自分自身を否み、日ごとに十字架を負い、私に従いなさい」。自己を否む意義を洞察するなら、なぜ日ごとに十字架を負わなければならないか明らかになります。十字架を負うことは特別な試みではありませんし、十字架がそれへと召す特別な苦難でもありません。平穩で繁栄している時でも、十字架を負う必要性は依然としてますます逼迫しています。自己は常に身近な敵であり、常にその力を取り戻そうと狙っています。パウロは第三の天から下って来た時、高ぶる危険性がありました。自己を否んで十字架を負うことは、日々の心がけでなければなりません。パウロは「私はキリストと共に十字架に付けられました」「私には十字架以外に誇ることがあってはなりません。この十字架によって私はこの世に対して十字架につけられたのです」と言いましたが、彼は自分自身について言ったのであり、十字架に付けられた命を毎瞬生きていました。

あなたは十字架を持つ手の図案を見たことがあるかもしれません。それには *Teneto et Tenem* という標語が書いてあります。この標語の意味は、私は担い、担われるです。もっと砕けた言い方をすると、私は担ぎ、担がれるです。キリストの十字架の前に述べられた言葉——「あなたの十字架を負って」——はよく知られており、前者の思想を表します。あなたの十字架を受け入れ、それを担いなさい。キリストが十字架に付けられた後に聖霊によって与えられた言葉——「キリストと共に十字架につけられました」——は、私たちの命として栄光を受け、啓示されましたが、どちらかというとも後者の面を示します。彼の十字架、十字架につけられた方があなたを担って下さると信じなさい。この御業が成就される前は、「あなたの十字架を負いなさい」しかありませんでした。今、成就された御業が啓示され、「私はキリストと共に十字架につけられました。私は十字架を担い、十字架は私を担います」に昇華されます。「私はキリストと共に十字架につけられました。キリストが私の内に生きておられます」。十字架の担う力によってのみ、私た

ちは十字架を担うことができます。

あなたの十字架を負いなさい

そうです、彼に従うために満たすべき条件として最初に語られたことが、その祝福された成果となるのです。「私に従いなさい」という召しを私たちが聞く時、私たちはそれが自分にとって何を意味するのかもっばら考えがちです。そうするのは必要なことです。しかし、それは最も重要な問題ではありません。信頼に足る指導者は、道中全責任を負い、全ての必要を備えてくれます。自己を否んで日ごとに十字架を負うことについて考える時、私たちはその意義を何と少ししか知らないか感じ、自分の知っていることを何と少ししか実行できないか感じます。私たちは、十字架を負って従うよう私たちに召しておられるイエスに堅く心を傾ける必要があります。カルバリで彼はこの道を先立って行き、私たちのために道を拓かれました。この道は神の御力の御座にまで至る道です。私たちの心を堅く彼に傾けましょう。彼が弟子たちを導かれたように、彼は私たちに導いてくださいます。十字架は奥義です。十字架を負うことは深遠な奥義です。キリストと共に十字架につけられることは贖いの最も深遠な奥義です。神の隠された智恵は奥義です。キリストに従いたいという真実な願いを持って彼に従いましょう。そして、彼のように御父の栄光のために生き、彼と共に死を通り抜けて私たちの指導者である彼と共に充ち満ちた命に至りましょう。

第3章 十字架は神への道

「キリストも罪のためにひとたび苦しみました。

義なる方が不義な者たちのために苦しまれたのです。

それは彼が私たちを神にもたらすためでした」(1ペテロ3:18)

十字架は罪を示します。神に対する憎悪としての罪を完全に認め、罪の邪悪さの責任を負わない限り、人は神のもとに来ることはできません。十字架は呪いを示します。罪に対する神の裁きを示します。この裁きを正しいものとして受け入れ、認めない限り、人は神の臨在に回復される術はありません。十字架は苦難を示します。苦難の中で神の御旨を受け入れ、すべてを明け渡す時初めて、神と結ばれることができるようになります。十字架を死を示します。人が今の命をきっぱりと完全に手放し、それに対して死ぬ覚悟ができたとき初めて、人は神の命と栄光の中に入れるようになり、神に完全に受け入れてもらえるようになります。これをすべてキリストは行われました。彼の全生涯は十字架の霊がその原動力でした。

彼が十字架を負い、神の聖なる臨在の中に入ったことにより、一つの道が開かれました。この道によって私たちも近づくことができます。彼が罪に対する神の裁きを負って死なれたことにより、罪は除き去られました。彼は罪の終わりとなられました。罪定めと呪いと死を負って、彼は罪を運び去られました。彼は死の力を持つ者の力を無効にして滅ぼし、彼の囚人たちであった私たちを解放して下さいました。キリストの十字架と血と死は罪人に対する神の保証です。この救い主を受け入れて自分を委ねる人はみな、ただちに無罪放免され、永遠に神の好意と友好を受けることができます。神の律法が私たちに突きつけていたすべての要求、罪とサタンが私たちの上に有していたすべての力、すべては終わります。イエスの死は罪と死の死だったのです。十字架の道はキリストが私たちのために開いて下さった道です。この道により、私たちは神に近づく完全な自由と力を持ちます。

十字架は人が神のもとに行く唯一の道です。この道をキリストご自身も歩まれ、この道を彼は私たちのために開いて下さいました。この道を私たちも歩みます。私たちが他の人たちを導きうるのはこの道しかありません。

十字架の道

十字架の道はイエスが人として個人的に全生涯を通して歩まれた道でした。彼は私たちの先駆者として、私たちのために神の御前に行き、そこに現れることができます。「彼は苦難を通して完成されたので、彼に従うすべての者たちに対して永遠の救いの創始者となられたのです」。イエスご自身にとって、十字架は神への道でした。

死による以外に、完全に命を明け渡す以外に、キリストが神に至る道はありませんでした。それ

ならなおさら、罪人が神のみもとに来て神の命で満たされる道は、これしかないにちがいありません。そして今や、キリストの死は成就された事実である以上、私たちが彼の中で受ける死と命は、私たちの内に働くそのような完全な明け渡しの力であり、私たちを導いて幸いな内住へと至らせます。この信仰により人は喜びをもって、「私はキリストと共に十字架につけられました。私は十字架を誇ります。十字架によって私はこの世に対して十字架につけられました」と言うことができます。この十字架の霊はこの世に対抗し、この世から分離します。また、自己を喜ばせるものをすべて放棄させ、死に至るまでも神に対して絶対的に従順にならせます。この十字架の霊が全生涯と歩みを特徴付けます。日ごとに十字架を負い、それを誇るとき、十字架はまさに神への道になります。

祝福への道

この道で私たちは勝利を得、他の人々を祝福することができます。キリストは人々のために自分の命を与え、十字架に付けられることにより、人々を祝福する力を勝ち取られました。ペテロが第一の手紙で述べているように、栄光への道であるキリストの苦難を完全に受け入れることにより、彼は主のために証しする大胆さで満たされました。パウロは彼の主の苦難に完全にあずかることを熱烈に願いましたが、この情熱が彼に使徒としての力を与えました。教会が自分自身を神にささげ、人々のための犠牲としてささげる時、その度合いに応じて神の御霊の力は教会を通して働きます。十字架につけられたキリストが人々を救われます。十字架につけられたキリスト、私たちの内に生きて息吹を与えて下さる方は、私たちを彼の救いの御業のために用いることができますし、用いて下さるでしょう。そして、彼が私たちの内に生きて働かれるということが意味するのは、私たちも彼のように他の人々のために自分の命を与える用意があるということに他なりません。これが意味するのは——自分自身を忘れ、自分自身を犠牲にし、失われた人を勝ち取るためにすべてを耐え忍ぶということです。

死から出た命

最初、キリストと共に十字架につけられて彼の死を身に負うという真理の中に魂が入る時、魂はその主な目的は個人的な聖別であると思います。罪に対する死、この世に対する死、自己に対する死を、命の道、魂に対する祝福と見なします。しかし、このような願いは魂をキリストに信頼するよう真に導くことはできません。キリストにおいてのみ、死と死から出た命とを知ることができ、見いだすことができます。彼と接触することなしに、彼の御父に対する従順と罪に対する勝利はすべて、個人的な栄光のためではなく彼の周りにいる人々の救いのためであった、という秘訣は開かれることはありません。他の人々のために喜んで働き、自分の命を与えようとする人でなければ、十字架の道を歩むことはできないことを信者は学びます。他方、他の人々を祝福する唯一の真の力は、この世と自己に対する死である十字架が私たちの日々の生活の法則となる時、与えられます。

十字架は神に至るキリストの道でした——彼ご自身にとってそうであり、私たちにとってもそうです。十字架は神に至る私たちの道です——私たち自身にとってそうであり、他の人々にとってもそうです。十字架は私たちのためであり、それは他の人々にとってもそうなるためです。

教会は常に、救いの奉仕の力の秘訣について話しています。しかし、この世に対する唯一の力はこの世に対して十字架につけられることであることを、何と少ししか知らないことか。この世に対する唯一の力は十字架につけられたキリストです。十字架につけられたキリストは人々にとってつまづきの石であり愚かですが、「私はキリストと共に十字架につけられました」と言いうる人々によって栄光を受けます。このように経験され、栄光を受けた十字架の宣べ伝えこそ、神の力なのです。

第4章 十字架の勝利

「彼は、私たちを責めて不利に陥れていた証書を、その規定と共に塗り消し、これを取り除いて、彼の十字架に釘づけてしまわれました。そして、諸々の支配者たちと権力者たちを彼ご自身からはぎ取り、彼らをさらしものとし、彼らに対して勝ち誇られたのです。」（コロサイ2:14, 15）

「しかし、神に感謝します。神は常に私たちをキリストにあって勝利のうちに導き、私たちを通して彼を知る知識の香りを至る所に放って下さいます。」（2コリント2:14）

神がアダムを楽園の中に置かれた時、それはアダムが楽園を享受するためだけでなく、それを守るためでもありました。そこに何らかの悪の力が存在していたことは明らかであり、彼はそれに警戒し、それから楽園を守らなければなりません。神が六日間で造られたものはすべてはなはだ良いものでしたから、悪はその前から存在していたに違いありません。悪がどのように存在するに至ったのか、また悪がどこから来たのか、聖書は啓示していません。しかし、悪が存在すること、そして新しく創造された神の園と人の住まいの中央に危害を加えて滅ぼそうと脅かしていた事実で十分です。神の狙いはこの悪しき者から力を奪い去ることであり、人という手段を通してそうすることを意図されました。この思想から自然に、人はすでに自分の前に存在していた悪を征服するという、まさにこの目的のために創造されたのではないか、ということが示唆されます。これがこのあまり重要そうには見えない地球を宇宙の歴史の中心としました。混沌が生じたのは間違いなくこの悪の力によってであり、この悪の力は前の王国の廃墟の中から起こされた世界でも前の王国を維持しようと依然として狙っていました。まさにその世界に人は創造されたのです。それは人がそれを征服して追い出すためでした。この世界が神と天使たちの目から見てこんなにも重要なのはそのためです。この世界は天と地獄が衝突して命がけの戦いが行われる戦場なのです。

十字架の敵

聖書から教わるまで、私たちは悲惨な人類の歴史を決して正しく理解することはできません。神には万物を支配する目的があります。他方、自然な成長と発展、人を支配する体系的な組織と王国以外の何物にも見えない事柄のただ中で、それが人々を暗闇の中に拘束し、神の御子の王国に対する戦いのために人々を利用しているのです。私たちの思いもよらない規模で、諸々の時代の緩やかな流れの中、神が忍耐しておられる間、人間の意志と行動の完全な自由の渦中で、止むことのない戦いが続いてきたのです。この問題には疑問の余地がありませんが、この戦いは長期にわたる破壊的なものです。この戦いの歴史において、

十字架は転換点です。

最初に読んだ御言葉は素晴らしい啓示を与えます。それは十字架の贖いの意義を示します。彼は

ご自身から主権者たちや権力者たちをはぎ取り、彼らをさらしものとし、（十字架において）彼らに対して勝ち誇られました。十字架の暗闇の中、暗闇の力は猛攻を加えました。彼らは自分たちの恐るべき力を総動員して彼に押し迫り、まさに地獄の暗闇と凄惨さをもって彼を取り囲みました。彼らは分厚い暗雲を形成したので、神の御顔の光さえも彼を見放しました。しかし、彼はご自身から彼らをはぎ取り、敵どもを打ちのめして、誘惑に勝利されました。彼は彼らをさらしものとし、霊の全世界に、御使いたちと悪鬼たちの前で、

彼の勝利を知らしめたのです。

墓さえも死者を解放しました。こうして彼は彼らに対して勝利されました。このもう一つの世界では十字架は勝利の象徴です。彼は勝利のうちに彼らを捕虜として引いて行かれました。彼らの力は永遠に砕かれ、彼らが人々を閉じ込めていた獄屋の門は破壊されて開放され、彼らに捕らえられていた者たちに解放が告げ知らされました。この世の君は今や追放されています。彼にはもはや解放を望む人々を束縛下にとどめる力はありません。彼が今支配できるのは、彼の奴隷であることに同意する人たちだけです。今や、自分自身をキリストと彼の十字架に委ねる人はみな、完全に自由です。

十字架は勝利です。これが最初に読んだ御言葉が示す偉大な教えです。十字架は勝利です。この勝利はキリストが「成就した」と叫ばれた時から始まりました。これが凱進行進の始まりであり、キリストはこの凱進行進の中、隠された栄光を伴って世界中を歩まれます。彼はとりこにされていた者をとりこにし、彼が贖った者たちを自由へと導かれます。そして信者は今、「神に感謝します。彼は常に私たちをキリストにあって勝利のうちに導いてくださいます」と常に喜ぶことができます。十字架の思想、十字架の下の歩み、十字架の宣言はすべて、神の勝利の音色を帯びているべきです。「死は勝利に飲み込まれました。神に感謝します。神は私たちの主イエス・キリストを通して私たちに勝利を与えてくださいます」。

これがなければ、十字架の力の意義に関する私たちの理解とそれに関する私たちの経験は欠け目のあるものになってしまうにちがいありません。私たちの個人生活においても、また、他の人々のための私たちの労苦においても、私たちはこの欠け目を経験するでしょう。私たちの個人生活において、十字架は重荷となり、十字架を負うようにという召しは従うのが困難な律法となり、十字架につけられた生活を生きようとする試みは失敗し、日ごとに死ぬという思想にうんざりしてしまうでしょう。肉を十字架につけるには絶えず目をさまして自己を否む必要があるため、これは成功する見込みのない無駄な努力だと諦めてしまうでしょう。私たちが

十字架は勝利である

ことをある程度悟らない限り、そうなるしかないのです。私たちは肉を十字架につける必要はありません。それはキリストによってなされました。カルバリの十字架の行為は決済ずみの取

引です。それから発する命と霊は絶えざる力を及ぼします。私たちに対する要求は信じることであり、快活であることです。彼の死未満の何物も私たちにとって十分ではありません。彼の死未満の何物も私たちの役に立ちません。「神に感謝します。神は私たちを常にキリストにあって勝利のうちに導いてくださいます」。

この世における私たちの奉仕において、暗闇の力に対する十字架の勝利を信じることはとても重要です。この真理に対する洞察力だけが、私たちの敵の超自然的な力と超自然的な狡猾さを私たちに教えることができます。これ以外の何ものも、私たちが「この暗闇の世の支配者に対して」格闘する時、私たちの目標がどうあるべきか教えることはできません——私たちの目標は人々をこの世から、この世の君の力から連れ出すことなのです。十字架が勝ち取って永遠に私たちに与えられた勝利に対する洞察力、これ以外の何ものも私たちが私たちの真の立場に着かせることはできません。私たちは私たちの勝利の王の道具であり、僕です。私たちの唯一の願いは彼にあって勝利のうちに導かれることです。これ以外の何ものも、私たちの勇気と希望を奮い起こすことはできません。私たちはこの勇気と希望を、敵が大いなる力で私たちに押し迫り、私たちが自分の無力さを感じる時、必要とします。あらゆる奉仕と戦いにおいて、私たちは信仰によって、「神に感謝します。神は私たちを常にキリストにあって勝利のうちに導いてくださいます」ということを学ばなければなりません。愚かさや弱さ、屈辱と恥を伴う十字架は、永遠にキリストが勝ち取られた勝利のしるしです。キリストが勝利されたのは、この地上の戦いの武器によってではありません。この勝利により、教会もキリストのすべての信者も常に勝利を得ることができます。それは、十字架につけられた主の霊の中にますます深く入り込み、ますます完全に自分を主に委ねることによってです。

第5章 この世の磔殺

「なぜなら私にとって、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に断じて誇ることがあってはならないからです。この十字架により、この世は私に対して十字架につけられ私はこの世に対して十字架につけられたのです。」（ガラテヤ4:14）

今日の教会にとって、教会のこの世に対する関係という問題ほど重大な問題はありません。キリストが使われた「この世」という言葉の意味は簡単です。彼はこの表現を、墮落した状態にある人類、神から離れた人類の状態を指すのに用いられました。彼はこの世を組織化された体制あるいは王国と見なされました。それは彼の王国の正反対であり、道徳上の敵です。この世には強力な目に見えない力、この世の神がおり、それがこの世を支配しています。ある霊、この世の霊がこの世に充満しており、この世に力を与えます。彼はご自分の性格について、「私はこの世の者ではありません」と一度ならず語られました。彼は弟子たちにはっきりと、「あなたたちはこの世の者ではありません」と教えられました。彼は弟子たちに、彼らはこの世の者ではないので、この世は彼を憎んだように彼らをも憎むであろう、と警告されました。受難の中、彼は言われました、「この世の君が来ますが、私のうちに何も見いだすことはありません」「今はあなたたちの時、暗闇の力です」「元気を出しなさい。私はこの世に打ち勝ったのです」。この世は彼を憎んで十字架に釘付けましたが、その時、この世はこの世の神の力の下でその真の霊を現しました。十字架でキリストは彼の霊を現し、あらゆる脅しと約束を伴うこの世を拒絶されました。十字架は、「私の王国はこの世のものではありません」という彼の御言葉の証印です。私たちが十字架を愛して十字架によって生きれば生きるほど、私たちはますますこの世の何たるかを知り、この世から分離すべきことを知ります。

この二つの王国間の相違と敵意は相容れません。この世がどれほどクリスチャンの影響で外面的に変えられたとしても、その性質は元のままです。この世と教会の協力がどれほど緊密で良好に見えたとしても、その平和は空しい一時的なものです。罪と呪いを啓示する十字架が完全に宣べ伝えられ、それを受け入れて負うように迫るなら——たちまち敵意を見て取れるようになります。神から生まれた者以外に、この世に打ち勝てる者はいません。

十字架を誇る

最初の御言葉から、パウロが十字架とこの世の間の敵意をどれほど明らかに感じていたのか、またそれをどれほど大胆に宣べ伝えたのか見ることができます。「私は十字架を誇ります。十字架を通してこの世は私に対して十字架につけられ、私はこの世に対して十字架につけられたのです」。彼は十字架と一体化されていたので、この世に対する十字架の関係が彼の関係になったのです。十字架がこの二者を分離しました。十字架は、この世がキリストに有罪宣告をした印でした。パウロは十字架を受け入れ、この世によって十字架につけられ、この世に対して十字架に

つけられました。十字架は、神によるこの世の有罪宣告でした。パウロは、この世は罪に定められ、呪いの下にあるのを見ました。十字架は彼自身とこの世を今と同じように永遠に分離します。十字架においてのみ、両者は出会い、和解することができます。このゆえに彼は十字架を誇り、人々をこの世から神にもたらす唯一の力としての十字架を宣べ伝えたのです。

多くのクリスチアンの見方は、キリスト、ヨハネ、パウロの見方の反対です。彼らの話を聞くと、まるで何らかの方法でこの世から呪いが取り除かれ、どういうわけかこの世は性質的に改善されたかのようです。彼らはこの世に歩み寄り友好を申し出ることで、この世を教化して勝ち取ることを考えます。彼らは、教会の仕事はクリスチャン精神をこの世に浸透させ、この世を専有することであると見なします。彼らは、それ以上にこの世の霊が教会に浸透し、教会を専有することを見ません。十字架のつまずきは排除され、十字架はこの世の花々で飾り立てられます。それでこの世は大いに満足し、この世の神々の間に十字架の占める場所を与えます。

敵との戦い

戦いにおいて、敵の力を過小評価することほど危険なことはありません。教会の働きは戦いであり、やむことのない格闘です。「私たちの格闘は肉や血に対するものではなく、支配者たち、権力者たち、この暗闇の世の支配者たち、天上にいる悪の霊の軍勢に対するものです」。この世は罪深い人類であり、単なる個人の総計ではなく、自分の罪に気づくことなく導かれています。この世は組織化された軍隊であり、一つの活気づける力、暗闇の力により無意識のうちに動かされ、ひとりの指導者、この世の神によって導かれています。「以前あなたたちはこの世の道にしたがって、空中の権を持つ君、今も不従順の子らの中に働いている霊にしたがって歩んでいました」。教会がこの真理のすべての意味を受け入れるとき初めて、教会は十字架の意義を理解できるようになります。十字架は人々をこの世から連れ出すものであることを、教会は見るようになるようになります。そして、十字架の神聖な不可解さを絶えずすべて宣べ伝える以外に、この世に勝利し、人々をこの世から救い出せるものはない、ということを知る勇気を教会は持つようになります。霊の世界の軍勢、「天上にいる悪の霊の軍勢」は、地上で人々の内に働いており、より高い力、神の力、「支配者たちや権力者たちを廃棄して、十字架で彼らに対して勝ち誇られた」方によってのみ、征服して従えることができます。十字架、罪と呪いと死とを伴い、愛と命と勝利とを伴う十字架だけが、神の力なのです。

盲目にされた知性

この世の絶大な力はその暗闇の中にあります。「この世の神が不信仰な者たちの知性を盲目にしたのです」。「私たちの格闘はこの暗闇の世の支配者たちに対してです」。もしこの世の霊が信者や教会の中に少しでもあるなら、その分彼らは物事を神の光の中で見ることができなくなります。彼らは彼らの内にあるこの世の霊による偏見で毒された心で霊的な真理を判断します。このような心の状態では、いかに目的が誠実で、真剣に考え、知力をふりしぼったとしても、神の

真理を理解して受け入れることができる度合いは、神の霊と彼の十字架がこの世の霊を追い出された度合い、あるいは追い出そうとされる度合いを越えることはありません。穏やかに聖霊を待ち望み、聖霊に明け渡す時、聖霊だけが光となります。そして、この光は心の目を開いて、何がこの世のものであり、何が神のものであるか、見て知ることができるようにします。聖霊に真に明け渡す唯一の道は、肉とこの世の磔殺を伴う十字架を私たちの生活の規範とすることです。十字架とこの世は常に正面衝突します。

この世は罪が生み出した廃墟です。人は天の命の力により、神との交わりの中、彼の御旨に服しつつ地上に住むはずでした。人が罪を犯した時、人はこの現在の目に見えない世界の力の下に完全に陥りました。この世の神がこの世を支配し、誘惑と罪の手段としてそれを利用しています。人の目は霊的な永遠のものに対して閉ざされ、時間と感覚が人を征服し支配しました。人々の中には、まるでキリストの十字架がこの世の呪いと罪の力を取り去ったかのように話す人もいます。彼らによると、信者は今や危険を犯すことなく自由にこの世の中に入って楽しむことができます。また、教会は今やこの世を専有する力を持っており、神のためにこの世を獲得するよう召されています。これは確かに聖書が教えていることではありません。十字架が呪いを取り除くのは信者からであって、この世からではありません。何であれ罪を宿しているものは、それに応じてその上に呪いが臨みます。信者が所有するこの世とこの世のものは、まず御言葉と祈りによって聖別されなければなりません。十字架とキリストの霊によりこの世の霊の邪悪さを見いだしてそれから解放されること以外に、また、私たちの原動力である御霊と十字架の力以外に、この世にありつつこの世の者ではない状態に私たちを保てるものはありません。キリストが十字架でこの世を征服するには、苦しみと血の汗、死闘、命を犠牲にすることが必要でした。彼の十字架における彼との交わりの中に心から完全に入る以外に、私たちをこの世の力から救いうるものはありません。

キリストと共に十字架につけられた

ガラテヤ人への手紙には、キリストの十字架に言及している節がいくつかあります。その中の一節だけが、贖いについて明確に語っています。「キリストは私たちのために呪われた者となって、私たちを呪いから贖って下さいました」。他の節はみな、十字架の交わりと、十字架が私たちの内なる生活に対して持つ関係についてです。「私はキリストと共に十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです」「キリストのものである人たちは肉を十字架につけてしまったのです」「私はこの世に対して十字架につけられました」とパウロが言う時、彼はある生活、内なる傾向、霊的経験について述べているのです。それにより、キリストが十字架を負われた時の霊と原動力が保たれ現されます。多くの人は「私は十字架を誇ります」と告白し、キリストの義を信じる信仰により神の御前に義とされると見なします。彼らはこの信仰を聖書に対する忠実さの大きな証拠と見なします。しかしそれでも、彼らはこの世の霊に属するものを心から楽しみ、許容し、それにあずかっているのです。これは、彼らの宗教ではこの世を十字架につける十字架を誇る余地は事実上まったくないことを証明し

ます。贖いの十字架と、十字架につけられたこの世は平和です。この世を呪われたものとして十字架につけ、私たちをこの世に対して十字架につけられた者に保つ十字架は知られていません。

義認のためだけでなく聖化のためでもある十字架の宣べ伝え、罪の赦しのためだけでなくこの世に対する力、この世の霊からの完全な解放のためでもある十字架の宣べ伝えが、パウロにおいて地位を得ていたように教会においても地位を得るようになるには、私たちは神に懇願して「この世」という言葉で彼が何を意味しておられるのか、十字架の力によって彼は何をしようとしておられるのか啓示していただく必要があります。この世とそこにあるすべてのものに対して事実上明確に十字架につけられた人々の生活の中で、十字架はその力を立証するのです。

十字架

主よ！私は日々、あなたの素晴らしい十字架、
カルバリの十字架を見つめます。

日々、私はその上に両手を伸ばし、

あなたと共に死にます。（2コリント4:10, 11）

最愛の主よ、私は「十字架を誇ります」。（ガラテヤ4:14）

なぜなら、私は知っているからです、

私がどこへ行こうとも、

十字架こそ救いの力、満足であることを。

日々の十字架は深遠な喜びとなります。

なぜなら、十字架のすぐ向こう側で、

十字架と冠は呼応するのを見るからです。（ヘブル12:2）

ああ！恵み深い主よ、あなたから日々十字架を受け取ることは、

何と甘いことか！

十字架の益と損失は決して分け得ないことを

私は知っています。

日々の十字架は、

私をあなたから遠ざけるすべてのものを日々失うことです。

日々の十字架は、日々すべてを得ることです。（ピリピ3:7, 8）

あなたこそ私の分です。—— B. P. H.